『厚生新編』における心的疾病
―「相思病」と「耽飲」―

八　百　啓　介

はじめに

江戸時代後期のわが国における西洋百科事典の翻訳である『厚生新編』については、原著であるフランス人神父ショメール（N.Chomel）の『家政事典（*DICTIONAIRE ŒCONOMIQUE*）』（1709 年刊）とそのオランダ語版第二版で翻訳の原本となった『日用百科事典（*ALGEMEEN HUISHOUDELIJK-, NATUUR-, ZEDEKUNDIG- EN KONST- WOORDENBOEK*）』（7 冊本）（1778 年刊）についての書誌的研究や蕃書調所における編纂過程や訳語についてのいくつかの研究がある(1)。

しかし、『厚生新編』の項目がどのような基準で『日用百科事典』の項目を採用したのかについては、いまだ明らかにされておらず、わずかに板沢武雄氏によって「内容はもちろん全部を訳したものではなく、事項を選択して訳したものである。その選択の基準を詳かにしないが実用本位で、我が国民生活に必要なりと認めたものからはじめたもののようである（中略）訳した部分を原文と対照して見ると、その事項の全文を訳したものでもない。必要な部分のみを訳している。しかし訳した部分は可成忠実な逐語訳である。」(2) とされ、また杉本つとむ氏によって「細部を重箱の隅をつつくようにみていけば、欠落や省略などもあろう。しかし全体的にほんとうによく訳されていて、翻訳はすばらしいできばえである。」(3) という説明があるに過ぎず、具体的な分析は行なわれていない。

筆者はこれまで『厚生新編』とその原本であるショメール『日用百科事典』の比較研究に基づき、19 世紀における輸入オランダ語事典の比較研究を行なって来た(4)。そこで本稿では、個別具体的な事典の項目の研究として、『厚生新編』の中で重要な位置を占める疾病の項目から「相思病（コイノヤマイ）」「飲耽」という二つの心的疾病を取り上げ、その採用の意味について考察するとともに、文化的基盤の相違に起因する道徳的差異の中で、その身体観が江戸時代の封建制社会における儒教的道徳観にどのように変換されていったかを考察してみたい。

第１章　『厚生新編』の疾病項目とヨーロッパ医学における心的疾病

オランダ語百科事典であるショメール『日用百科事典』の翻訳事業として、文政８年（1811）に江戸幕府により編纂が開始された『厚生新編』は、正編 70 巻（このうち第 31・32 巻は欠）・続稿 32 巻からなり、その成立年代は続稿第 31・32 巻の「弘化二年乙巳八月八日」の日付を最後としている。杉本つとむ氏によれば、その項目数は正編 377 項目・続稿 177 項目の合計 554 項目であり、このうち最も多いのが生植部の 196 項目、次いで医薬治方部その他の 118 項目であるという(5)。

しかし、今回、科学研究費補助金による共同研究の結果、『厚生新編』全 102 巻（うち２巻欠）の実際の項目数は、正編 1192 項目・続稿 184 項目の合計 1376 項目にものぼっていることが明らかとなった(6)。また前述のごとく、『厚生新編』は、ショメール『日用百科事典（*ALGEMEEN HUISHOUDELIJK-, NATUUR-, ZEDEKUNDIG- EN KONST- WOORDENBOEK*）』第二版（７冊本）（1778 年刊）の翻訳であり、原本である『日用百科事典』の全項目数は１万 7095 項目であり、このうち 1107 項目が分割・再編されて、『厚生新編』の 1376 項目に収録されている(7)。

『厚生新編』の項目のうち外科的外傷・生理的代謝・保険知識を除く疾病項目は 111 項目であるが、この中には「喉風」「假喉風」（ともに『日用百科事典』の KEEL-ZEER 項目の翻訳）や「内翳眼の一」「内翳眼の二付録」（ともに『日用百科事典』の STAAR 項目の翻訳）や「結石病」「結石病の二」（ともに『日用百科事典』の STEEN 項目の翻訳）のように、原本である『日用百科事典』の項目が分割されたため重複している（付表）。

ここでは、これら疾病項目中から「不寝（AGRYPNIA）」（第五巻医治部一）・「相思病（EROTIMANIA）」（第三十八巻雑集疾病類）・「耽飲（ZUIPEN）」（続稿二十四巻雑集）の３つの心的疾病に注目したい。

『厚生新編』における３つの心的疾病項目のうち「不寝」・「相思病」の２つは大槻玄沢の翻訳・宇田川玄真の校訂であり、「耽飲」は杉田成卿の翻訳・宇田川榕菴の校訂となっている。

『厚生新編』は『日用百科事典』の A 項目からアルファベット順に翻訳したものであるが、大槻玄沢は『厚生新編』においては『日用百科事典』の A ～ E 項目および M 項目を翻訳しているが、この中で A 項目から E 項目に至る 39 の疾病項目をアルファベット順に翻訳している。これに対して杉田成卿は、『厚生新編』続稿において『日用百科事典』の S ～ T 項目を翻訳する一方、疾病に関しては S ～ Z 項目から、STAAR・STEEN・TANDPIJN¥ZUIPEN の４つの項目をそれぞれ「内翳眼の一」「内翳眼の二付録」・「結石病」「結石病の二」・「耽飲」の５つの項目に編集している。

『日用百科事典』の項目には、このほかEPILEPSIA（癲癇）・KRANKZINNIGHEID（痴呆）・MELANCOLIE（鬱病）・STUIPEN（ひきつけ）などの心的疾病があることから、『厚生新編』に採用された項目は、そのすべてを網羅したものではなく、翻訳者の関心に従って選択されたものといえよう。

江戸時代後期の蘭学は、『解体新書』の翻訳に象徴されるごとく、医学とりわけ解剖学を中心として始まったが、このことは儒教的世界観とキリスト教的世界観との枠を越えて人体構造の普遍性が認識されたという点において、わが国における近代的身体観への第一歩であったといえよう。当時のヨーロッパにおいては、デカルト派哲学にしたがって魂と身体とを区別して、身体を機械とみなすボンテクー（1640-1685）やブールハーフェ（H.Boerhaave）（1668-1738）による人間の身体を神が創った機械であるとする機械論的身体観が医学思想の基盤となっていた(8)。江戸時代における西洋精神医学の受容については、文化２年（1805）の宇田川玄真著『西説医範提綱釈義』において、痱（中風）や癇（癲癇）や不寐（不眠症）を神経の疾病とみなすブランカールト（S.Blanckaart）（1650-1702）の神経液説が紹介されたことが指摘されている(9)。

『厚生新編』の疾病項目に心的疾病が含まれていることは、西洋医学の身体観が心的領域に及んだことを意味しているが、わが国においても文政２年（1819）には漢方医であった土田献によってわが国最初の精神医学書である『癲癇狂経験編』が著されたが、この中で土田は「近世ニ迨ンデ之ヲ患フル者ノ更ラニ多ク連染スルカ如ク、然カリ蓋シ太平日久而貴賤思慮嗜欲節ナラザルノ致ス所ナリ」と述べている(10)。このことは『厚生新編』の心的疾病が翻訳された19世紀初期のわが国においては、国内経済の発展を背景に貧富の格差が拡大し、経済的欲求とストレスが個人に蓄積する近代の社会病理現象が顕在化していたことが背景にあるといえよう(11)。

付表　『厚生新編』疾病名（外科的外傷・生理的代謝・保健知識を除く）

病　　名	オランダ語病名	訳　校　者	出　　典
喘息	AAMBORSTIGHEID	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
咽頭腫	AMANDEL-GEZWEL	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
一種眼矇	AMAUROSIS	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
ホンツホンゲル	APPETITUS CANINUS	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
ベドルヘンエートリュスト	APPETITUS DPRAVATUS	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
不語暴瘖病	APAHONIA	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
アポステーム	APOSTEEM	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
脉脹	ADERBREUK	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
痔	AAMBEIJEN	馬場佐十郎	第２巻疾病部一
頭髪脱落	ALOPECIA	大槻玄沢・宇田川玄真	第５巻医治部一
アエゲイプチヲン	AEGIJPTION	大槻玄沢・宇田川玄真	第５巻医治部一
不寝	AGRYPNIA	大槻玄沢・宇田川玄真	第５巻医治部一

バトラキュス	BATRACHUS	大槻玄沢・宇田川玄真	第９巻疾病部
卒中風	BEROERTE	大槻玄沢・宇田川玄真	第13巻医治部
血吐	BLOED-BRAAKING	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻身体及医治部
			続稿６巻身体及医治部
血唾	BLOEDSPOUWING	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻身体及医治部
			続稿６巻身体及医治部
凝結瘀血	GESTOLT-BLOED	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻身体及医治部
溺血	BLOED-PISSEN	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻身体及医治部
			続稿６巻身体及医治部
血液過多	BLOEDRIJKHEID	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻身体及医治部
			続稿６巻身体及医治部
失血	BLOEDVLOEIJING	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻医治部
腎臓血絡破裂溺血	BLOEDVLOEIJING der Nieren	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻医治部
ブルード・ヒン	BLOED-VIN	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻医治部
			続稿７巻医治部
尻臀熱爛	BLIK-AARS	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻医治部
			続稿８巻医治部
瞽腫	BLIND-GEZWEL	大槻玄沢・宇田川玄真	第18巻医治部
			続稿８巻医治部
発班熱	BLUTS-KOORTS	大槻玄沢・宇田川玄真	第19巻医治部
乳溢	BORSTEN (Droopende)	大槻玄沢・宇田川玄真	第20巻医治部
乳核	BORSTEN(Hardigheid der)	大槻玄沢・宇田川玄真	第20巻医治部
乳房恢発腫瘍	BORSTEN(Ontsteeking der)	大槻玄沢・宇田川玄真	第20巻医治部
乳房弛軟萎縮病	BORSTEN(Slappe of Verwelkte)	大槻玄沢・宇田川玄真	第20巻医治部
霍乳	BORT	大槻玄沢・宇田川玄真	第21巻疾病部
腹痛	BUIK-PIJN	大槻玄沢・宇田川玄真	第22巻雑集
腹瀉	BUIKLOOP	大槻玄沢・宇田川玄真	第23巻雑集
腹痛	BUIK-PIJN	大槻玄沢・宇田川玄真	第24巻雑集
大便不通	BIUK (Verstopte)	大槻玄沢・宇田川玄真	第24巻雑集
血液沸騰熱蒸	BLOED (Gistend of verhit)	大槻玄沢・宇田川玄真	第24巻雑集
便毒	BUIL-VENUS	大槻玄沢・宇田川玄真	第24巻雑集
疫毒腫	BUIL(Pest-)	大槻玄沢・宇田川玄真	第24巻雑集
耳聾	DOOFHEID	大槻玄沢・宇田川玄真	第34巻雑集
乳房結核	BORSTEN(Droopende)	大槻玄沢・宇田川玄真	第34巻雑集
不食減食	EETRUST (Verloorene)	大槻玄沢・宇田川玄真	第36巻雑集
眼瞼腫	EMPHIJSEMA	大槻玄沢・宇田川玄真	第37巻雑集
眼眥腫	ENCANTHIS	大槻玄沢・宇田川玄真	第37巻雑集
角膜潰腫	ENCAUMA	大槻玄沢・宇田川玄真	第37巻雑集
脱肛	ENDELDARMS UITZAKKING	大槻玄沢・宇田川玄真	第38巻雑集
一日熱	EPHEMERA	大槻玄沢・宇田川玄真	第38巻雑集
歯齦瘜肉	EBULUS	大槻玄沢・宇田川玄真	第38巻雑集

瘟瘻	ENGELSE ZIEK	大槻玄沢・宇田川玄真	第38巻雑集疾病類
相思病	EROTIMANIA	大槻玄沢・宇田川玄真	第38巻雑集疾病類
痒	JEUKTE	宇田川玄真	第39巻雑集
痛風	JIGT	宇田川玄真	第39巻雑集
傷冷毒痛風			第39巻雑集
流走痛			第39巻雑集
黄疸	ICTERUS	宇田川玄真	第39巻雑集
処女病	MAAGDE-ZIEKTE	宇田川榕菴・宇田川玄真・大槻玄沢	第40巻雑集
胃の諸病	MAAG GEBREEKEN	宇田川榕菴・宇田川玄真・大槻玄沢	第40巻雑集
癌瘡	KANKER	宇田川榕菴・宇田川玄真・大槻玄沢	第40巻雑集
胃虚の治法	MAAG GEBREEKEN	大槻玄沢・宇田川玄真	第42巻雑集
胃及び内臓焮腫	MAAG-ONTSTEEKING	大槻玄沢・宇田川玄真	第42巻雑集
胃病	MAAG-ZIEKTENS	大槻玄沢・宇田川玄真	第42巻雑集
胃痙	MAAG-KRAMP	大槻玄沢・宇田川玄真	第42巻雑集
胸濃病	ETTER-BORST	大槻玄沢・宇田川玄真	第42巻雑集
咽喉焮衝	KEEL-ONTSTEEKING	宇田川榕菴・宇田川玄真	第43巻雑集
喉風	kEEL ― ZEER	宇田川榕菴・宇田川玄真	第43巻雑集
假喉風			第43巻雑集
濃腫	ETTER-GEZWEL	大槻玄沢・宇田川玄真	第45巻雑集
瘡疹	EXANTHEMATA	大槻玄沢・宇田川玄真	第45巻雑集
腺腫	KLIER-GEZWEL	宇田川玄真	第47巻雑集
硬結腫	KNOESTGEZWEL	宇田川玄真	第47巻雑集
瘻瘡	FISTEL	宇田川玄真	第48巻雑集
疝	KOLIJK	宇田川玄真	第50巻雑集
熱病	KOORTS	宇田川榕菴・宇田川玄真	第52巻雑集
呼吸短促	KORTADEMIGHEID	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
小便淋瀝	KOUDE PIS	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
寒壊疽	KOUD-VUUR	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
膽臓結石	GAL-STEEN	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
膽液熱	GAL-ZIEKTE	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
黄疸	GAL-ZUCHT	宇田川榕菴・宇田川玄真	第54巻雑集
麻疹	MAZELEN	大槻玄沢・宇田川玄真	第55巻雑集
瘰癧	KROP-GEZWEL	宇田川榕菴・宇田川玄真	第58巻雑集
乾咳	KUCH	宇田川榕菴・宇田川玄真	第59巻雑集
悪性熱	KWAADAARDIGE KOORTZEN	宇田川榕菴・宇田川玄真	第59巻雑集
悪液病	KWAADZAPPIGHEID	宇田川榕菴・宇田川玄真	第59巻雑集
悪癖	KWAAD ZEER	大槻玄沢・宇田川榕菴	第60巻雑集
乳熱	MELK-KOORTS	大槻玄沢・宇田川榕菴	第61巻雑集

痱	LAMMIGHEID	小関三英・大槻玄沢	第64巻雑集
関節水腫	LEDE-WATER	宇田川榕菴・小関三英	第68巻雑集
軍卒病	LEGER-ZIEKTE	宇田川榕菴・小関三英	第70巻雑集
凝結瘀血	BLOED (Gestolt of Gestremt)	大槻玄沢・宇田川玄真	続稿６巻身体及医治部
腎臓血絡破裂溺血	BLOEDVLOEDING der Nieren	大槻玄沢・宇田川玄真	続稿７巻医治部
血石	BLOEDSTEEN	大槻玄沢・宇田川玄真	続稿７巻医治部
皮膚青班	BLAUWE VLEKKEN der huid	大槻玄沢・宇田川玄真	続稿８巻医治部
沈静にして生活をなす人膚体の色沢常平を失ふの症	BLEEKHEID	大槻玄沢・宇田川玄真	続稿８巻医治部
内翳眼の二付録	STAAR	杉田成卿・宇田川榕菴	続稿13巻雑集
肝崩	LEVERVLOED	宇田川榕菴・湊長安	続稿19巻雑集
肝虫	LEVER-WORMEN	宇田川榕菴・湊長安	続稿19巻雑集
肝腫	LEVER-ZUCHT	宇田川榕菴・湊長安	続稿19巻雑集
片頭痛	MIGRAINE	大槻玄東・小関三英	続稿21巻雑集
呼吸困難	MOEIELIJK ADELHARING	大槻玄東・宇田川榕菴	続稿23巻雑集
疫癘	PEST	箕作阮甫・宇田川榕菴	続稿24巻雑集
耽飲	ZUIPEN	杉田成卿・宇田川榕菴	続稿26巻雑集
内翳眼の一	STAAR	杉田立卿・宇田川榕菴	続稿26巻雑集
結石病	STEEN	杉田成卿・竹内玄同	続稿27巻雑集
結石病の二		杉田成卿・竹内玄同	続稿28巻雑集
歯痛	TAND-PIJN	杉田立卿・宇田川榕菴	続稿32巻雑集

出典）影印本『厚生新編』（恒和出版、1988年）

第２章　『厚生新編』における心的疾病

これら３つの心的疾病項目のうち、先ず『厚生新編』第五巻医治部一における「不寝」は

〇不寝　アガレイプニアヘードと名く　和蘭スラープロス

此症は精神躁擾乃甚しき事あるや或は思慮安からす或は困厄憂苦又堪忍ぶべからざる事、其外凡そ心労のある等にあり、又他の病によつて此病を兼發する事あり、若し此症を發するものは早く錬熟乃醫家に托して治療すへし遅滞するのこときは殆ど必死の病にも至るなり(12)

とあり、もっぱら「心労」による「躁擾」の病とされている。原文はショメール『日用百科事典』のＡ項目中の AGRYPNIA の訳であり、それによれば全文は

【原文】

(A) AGRYPNIA, *Slaaploosheid* , word dikwijls veroorzaakt door een al te sterke beweeging der leevensgeesten ; (B) wanneer onrust, bekommering, droefheid, zorge, ongeduld of eenige andere hertstogt, de mensch als vermeestert; ook gaat dit moeijelijk toeval wel met andere

ziektens gepaart. (C) Wanneer dit akelig ongemak te lange duurt, word het niet zelden van razernij gevolgt. (D) Als deze kwaal iemand overkomt, moet hij niet toeven met een kundig Geneesheer te raadpleegen; (E) dewijl men dit in de beginne verzuimende, dikwils den lijder een aldernaarste en zeekere dood veroorzaakt. (13)

【拙訳】

(A) アグリプニア即ち不眠症は、しばしば強すぎる生命力の動きによって生じる。(B) 不安、心配、悲しみ、懸念、短気、もしくは他の何らかの心労が人間を捉えたとき、この困難な出来事は他の病気とひとつになる。(C) この陰鬱な病気があまりに長く続くときは、狂気に至ることも稀ではない。(D) もしこの病気が誰かに降りかかったならば、その者は有能な医者に相談することをためらってはならない。(E) 初めにこのことを怠ったならば、患者はしばしばほとんど確実に死にいたる。

とあり、『厚生新編』では原文の下線（C）の第３文が省略されている。

これに対して残る２つの心的疾病「相思病（コイノヤマイ）」「耽飲」の項目からは、西洋における近代的身体観を異なる社会原理の上に変換しようとする工夫が見受けられる。

『厚生新編』第三十八巻雑集所収の「相思病（コイノヤマイ）」の構成は、①定義と区別、②段階と諸症、③治法、④薬剤の順となっており、その第一段落で

　此病は我恋慕する人を常に相思ひ？恋想像して其情思を遂んと欲して精神差錯し煩乱する病なり、此症はメランコリセアンズーニング（鬱憂病の感触の一種）にして一個の病とす(14)

と定義されている。これはショメール『日用百科事典』の E 項目中の EROTIMANIA の訳であり、それによれば

【原文】

EROTIMANIA ; *Liefde-drift* ; afkomstig van ἔρως *liefde* , waar van ἐρότικος gevormt is; (A) wort toegegepast op al ’t geen tot de liefde der beide kunnen eenige betrekking heeft; dog (B) inzonderheid word het gebezigt, om de uitzinnigheid mede te betekenen, waarmede de drift gepaart gaat, (C) om de lighaamelijke lust met het voorwerp zijner liefde te voldoen; of (D) in een gemaatigder zin genomen, dat vierige verlangen, dat een minnaar of minnares heeft, om met zijn of haar geliefde vereenigt te worden, beschouwende zulks als het grootste en volmaakste geluk, dat hen kan bejegenen; (E) het is een zoort van *melancolische aandoening* , eene waare ziekte; wordende door WILLIS *erotimania* , en door SENNERTUS *amor insanus* genoemt. (15)

【拙訳】

　エロチコスから出来たエロスすなわち愛に由来し、(A) 相思に至る素晴らしい関係を持つこ

とができるすべての人々に用いる。しかしながら(C)特にその愛の対象との身体的な快楽を満たすための(B)激情をもともなう狂気を意味するのに用いられる。あるいは、(D)恋人を持って、その愛をひとつにしたいと切望することを最大で完全な幸福とみなす、より穏健な意味にとられる。(E)それは一種の憂鬱な感情であり、本物の病気である。

とあり、下線（D）の第３文が省略されている。

また下線（C）の om de uitzinnigheid mede te betekenen, waar mede de drift gepaart gaat（激情をもともなう狂気）や verregaande of uitzinning liefde（行き過ぎた狂気の愛）が『厚生新編』では「精神差錯し煩乱する病」や「相思発狂病」「淫病」と訳されるなど、『日用百科事典』では基本的に「狂気」であり結論として「本物の病気」とされているのに対して、『厚生新編』ではもっぱら「病」であることが強調されている。

同様なことが『厚生新編』続稿二十六巻雑集の「耽飲」についても言える。

『厚生新編』続稿二十六巻雑集の「耽飲」の構成は、①悪癖を改める方法、②禁酒の困難…２つの理由、③酒を断する良法…酒を嫌悪せしむるの法、④酒中に入れる吐薬、⑤症状、⑥耽飲の癖を一洗する方法、⑦酒の害の順となっており、その冒頭には

夫レ耽飲家の常態ハ人々能く知れる所なれば今此に是を記載すること要せず。故に耽飲の人をして此悪癖を免しむるの方法を説示せんとす。看官若シ此癖を得る者あらば速に予の説く所に従ふ可し。

庶幾くハ天稟の明徳を全ふせん(16)

とある。その原文はショメール『日用百科事典』のＡ項目中の AGRYPNIA の訳であり、それによれば

【原文】

SUIPEN, *Dranken drinken*；wat deeze woorden betekenen, behoeven wij onze Lezers niet van te verwittigen, het is ook geenzins ons voorneemen om hier eene beschrijving van de Dronkenschap te doen, maar wel, om zodanige middelen aan de hand te geeven, die de zulken van onze Lezers, welke aan deezen afschuwelijken ondeugd zijn overgegeeven, waare het mogelijk daar van aftetrekken en een afkeer voor in te boesemen.

De zo geestige ARTZ of GENEESHEER, heeft hier zo wel en bondig over gehandelt, dat wij tot het bereiken van ons oogmerk, niet beter kunnen doen, dan ’t voornaamste daar van aan onze Lezers meede te deelen.(17)

【拙訳】

我々はこの言葉が意味することを読者に説明する必要はない。ここで酩酊の記述をすることは全く我々の意図ではなく、この忌まわしい悪徳にふける読者からそれを引き離し嫌悪を抱か

せることを可能にする手段を与えることである。

精神科医は、我々の意図に達するためには、その主要なことを読者に伝えることが最善のことであるということをここで充分簡潔に扱った。

とあり、『日用百科事典』では道徳的に「忌まわしい悪徳（afschuwelijken ondeugd）」とされる行為が『厚生新編』では「悪癖」とされているほか、下線部の一文が付加されている。

さらに『厚生新編』では上記の③で「耽飲」のメカニズムとして

耽飲の者ハ未ダ始より飲に耽るに非ず。漸徐に此悪癖を得る者なり。其初ハ味の美なると酔中の快なるとに誘惑せられ一二回沈酔するに至れば、爾後ハ半酔にして醒れば腸胃も是が為に腐れ心思も安からず四支沈重頭中重困なるを覚ふ。是に於て彼レ酒の能く是を治するを知るを以て再ビ飲まざるを得ず。此の如くして輙チ醒れば輙チ飲ミ胃漸く衰虚し遂に飲を絶ツ事を得ざるに至る故に耽飲家と雖モ啻に其美味の為に是を断ツ事を得ざるに非ず。彼レ其覚ふる所の患苦を治ずるに他法なきを以て曩者の経験に因て再ビ飲を求るに至るなり。(18)

と、飲酒による体調不良がかえって依存を深める原因となっていることを指摘して、その治療方法として

然ば耽飲の病を治するには啻に酒を嫌悪せしむるの法を行ふのみならす、又酒に代て其病苦を治する所の法方を考定すること是最要の事件なり。(19)

と、酒を嫌悪することとともに体調不良への酒に代わる治療が必要とされている。

このように中世キリスト教社会においては狂気や悪徳とされ、近代になって新たに広義の疾病とされるようになった「相思病」や「耽飲」が、『厚生新編』においてはあくまでも病気として認識されている。このことは、『日用百科事典』の出版された 18 世紀ヨーロッパにおいては、理性によりコントロールできない心性に起因する反理性的な行動は、もはや中世的な「罪」ではなく、近代的な「疾病」として認識され、治療の対象となっていったことがあるといえよう。

第３章　『厚生新編』における心的疾病と儒教的道徳観

『厚生新編』における心的疾病項目の注目すべき点は、内科的・外科的分野の物理的疾病とは異なり、18 世紀ヨーロッパにおけるキリスト社会道徳とかかわる治療法が、19 世紀わが国の封建制社会においてどのように説明されているかという点にある。

先ず「相思病（コイノヤマイ）」においては、その治療法として、前述の③の治法において

甚しき症となるものは其治法他なし。宜く患者恋々する所を必す遂せしむへきと云ふを以て患者を慰悦撫恤せしむるより良き方法有事はなし。又或は其牽恋する人を患者の家に来らしめ、

それと晤言対接せしむるは尤宜きを得るの治法とす。(20)

として、

一少年あり一少女と相互に懸想して朝夕居恒隙を窺ひ相見んはを互に思念す。時日を経るに随ひ尚益々思情慾念の断へかたく両人共に焼け焦るか如し。然るに其時日を経る中に其父母これを知覚し強て其忍ひ逢フの事を禁絶せしめ、尤配婚する事等は敢て許さずして厳禁せしに依て其少女鬱憂病を発し諸症種々備りて険重に至れり。(21)

となったため、「不日にして其情人と配偶せしめたり」(22) と、両人を配偶させることにより治癒した事例を紹介した後、

吾輩右の症を伴々こゝに列挙する所以は、少年にして斯の如く恋慕の情念劇しきは、必す人身の常機を損害することを慨ヒて諭示する為のミにもあらす。世の人乃父母たる者、(A)其子たる人年候に至れは時に或は斯の如く神思労傷するものもありと云ふ事を監察せす、唯常に児輩に喩告して萬つ温柔に生ひ立せ、道理の至極せる所を曉らしめは、(B)各自正心に復すへきか為にと、こゝに記すこと爾り。然れとも又其恋々する人の容姿を徒に見過し、或は常に其家に来り在るをも恬然として忽せにし、互に思ひ焦るゝの情念を熾盛ならしむる事なかれ。(C)其情態を察せは必す相見せしむるはなかるべし。然カせざる時は其恋情弥久しき程愈　其事に思を凝すこと切となり。終には其情に耐へすして人中にも忌ミ憚ることなきに至り、時に或は驚異すべき悩苦の篤疾となるに至り、時に臨て許多の禁戒諭言も其詮なきに至れはなり。

是を以て此の如くの父母となる人は、世の正しと称せらるゝ父母の常に示訓する所の例を能く目を属し監察して常に怠らす。(D)教誨を施すを至当の良法とす。又爰に云ヒ難きの根由ありて、父母といへとも、其児輩志す所の情意を強て制すること能ハす。或はこれに告るに聖経賢伝の礼法道理及恐るべき天道の正教を以てこれを諭すこと丁寧告戒至らざる所なしといへとも絶て是を制止服従すること能ハす。(23)

と、父母による「監察」の必要を説くとともに、「聖経賢伝の礼法道理」「天道の正教」の文言に見られる朱子学の「天道」思想による「喩告」「教誨」という道徳的療法を良法としている。(24)

これに対して原本の『日用百科事典』の EROTIMANIA の第 7 段落では

【原文】

Wij hebben dit geval niet enkeld hier geplaatst, om te toonen, hoe sterk een hevige liefde op de dierlijke huishouding van ’s menschen lighaam werkt; maar ook om aan zommige ouders tot eene waarschouwing te verstrekken, dat wanneer zij eene hartstocht van dien aart in hunne kinderen bemerken, die met zagtheid en drang van reden moeten zoeken te keer te gaan; en vooral niet oogluikende toelaaten, dat het gezigt en bijzijn van het beminde voorwerp de ontstookene vlam koestere; als dan worden de hinderpaalen en beletzelen,

die men naderhand te werk stelt, zo veele banden, die hunne liefde hoe langs hoe naauwer vereenigt, en die eindelijk in ongelukkige buitenspoorigheden, of akelige en benaauwde ziektens uitbarsten; gelukkig dan nog, als zulke ouderen, het voorbeeld van die braave vader en moeder volgen, in het zo even gemelde geval aangeroert. Zijn ’er egter verregaande oorzaaken, die de ouders volstrektelijk beletten, om dit middel niet bij der hand te kunnen neemen; en de liefdens-drift tot een zodanig uiterste is geraakt, dat de zedelijke middelen, naamelijk redden, overdenking en Godsdienst, niet kunnen uitwrogten; (25)

【拙訳】

この事例をここに挙げるのは、激しい恋愛が人体の動物的な日用に如何に強く働くかを示すためのみではなく、何人かの両親に対して、彼らが子供たちの中の理性の圧迫から優しく対処しなければならない本性の情熱に気付いたときに、注意すべきことを提供するためである。とりわけ愛する対象を見たり同席したりすることによって、燃え上がる炎が熱せられることを黙認してはならない。

もしそうすれば、後になって邪魔や妨害を働かせても、長ければ長いほど親密に結びつく彼らの愛を結び付け、最後には不幸な行き過ぎや不快で鬱陶しい病気が爆発する。なお幸いなことには、このような両親は、前述と同様の事例において言及される誠実な父母の例に従う。しかしながら、両親にこの手段を取ることを可能にさせずに絶対的に妨げる極端な原因があるならば、恋愛の情熱は道徳的な手段、すなわち理性、熟慮そして信仰が働かないところまで達する。

として、両者を配偶させることができなければ、道徳・理性・信仰などの及ばない事態に至るとして、道徳的療法の限界を認めている。このことから、

(1)『厚生新編』の文中の (D)「教誨を施すを至当の良法とす」に該当する文は原文には見られず、翻訳者による挿入であること

(2)「聖経賢伝の礼法道理」「天道の正教」の語句は、原文においては「道徳的な手段、すなわち理性、熟慮そして信仰（de zedelijke middelen, naamelijk redden, overdenking en Godsdienst）」の意訳であること

が分かる。

前述のごとく、直前の段落において配偶による治癒の事例が挙げられている文脈から、『日用百科事典』の原文の趣旨は、『厚生新編』に見られる「喩告」「教誨」という道徳的療法の有効性ではなく、むしろ道徳的療法の限界が正しいといえよう。『厚生新編』では他にも上記の如く、（A）「其子たる人年候に至れは時に或は斯の如く神思労傷するものもありと云ふ事を監察せす」、（B）「各自正心に復すへきか為にと」、（C）「其情態を察せは必す相見せしむるはなかるべ

し」の文によって、配偶という解決方法よりも観察と「喩告」「教誨」による道徳的療法の重要性を補強しており、『厚生新編』への翻訳において論旨が変換されている点は注視に値しよう。

このような『厚生新編』の心的疾病の治療法における道徳的療法の重視は「耽飲」の治療法においても見られる。「耽飲」においては、前述のごとく、第一段落の①悪癖を改める方法の末尾に、原文にはない「庶幾くハ天稟の明徳を全ふせん」が付加されているほか、⑦の酒の害においては

(ア)　酒客と雖モ皆悉ク義理を弁せざるに非ずと雖モ実に酔人は悪と厭ふ可きの甚しき者にして天賦の身体をして不具とならしむること盲人聾子よりも甚し。(26)

(イ)　酒ハ啻に人の天賦の失を露すのみならず又人をして曽テ思ハさる誤を致さしむ「セ子カ」古人の名の言に酒ハ失誤を起す者に非ず。天賦の性を露すのみと謂へり。然ども日今の歴視する所に拠るに、此言信す可からず。(27)

と、原文にはない下線部の語句が挿入されることによって、「耽飲」が「天賦」に反する悪癖であることが強調されている。すなわち、原本の『日用百科事典』の SUIPEN の項目においては上記の２箇所の文章は

(ア)【原文】

Maar, wat hooge gedagten deeze zoort van Menschen van zich zelven mogen hebben, blijft het waar, dat een drunken Man het affschuwelijkste Gedrogt is dat de Natuur ooit voorgebragt heeft. In der daad niets schijnt wanschapener en veragtelijker in de oogen van alle redelijke Menschen als een Dronkaart. (28)

【拙訳】

しかし、この種の人間が生まれつき幾分高尚な考えを持っているにしても、酔っ払いはかつて自然がもたらした最も忌まわしい怪物ということは事実である。実際、すべての理性的な人間の目には、大酒飲みほど奇形で卑しむべき者はないように思われる。

(イ)【原文】

De Dronkenschap ontdekt niet alleen dikmaals de verborgene gebreken van een Man, en vertoont hen op het haatelijkst, maar zij veroorzaakt dikwils feilen in hem, waartoe hij niet geneigt is. Daar is meer aartigheid dan waarheid in het zeggen van SENECA; dat de Dronkenschap gene gebreken baart, maar wel openbaart. De dagelijksche ondervinding leert ons het tegendeel. (29)

【拙訳】

飲酒はしばしば人の隠れた欠点を明らかにして憎悪を示すのみならず、しばしば彼が滅多に犯さない間違いの原因となる。飲酒は間違いを引き起こさないが露わにする、というセネカの言葉

の真実以上にふさわしいことがある。日常的な経験は我々にその反対のことを教えてくれる。とあり、『厚生新編』の文中の下線部の「天賦」に該当する語句はない。このことから、原文の「耽飲」はもはや中世的な「罪」ではなく、理性に反する行為であり、近代的な「疾病」であるという論理から、「天道」「天賦」といった儒教的自然観に反する「悪癖」であるという道徳論理への書き換えが行なわれているといえよう。

おわりに

以上、『厚生新編』から「不寝」「相思病（コイノヤマイ）」「飲耽」という心的疾病を取り上げ、ショメール『日用百科事典』の原文との比較から、ヨーロッパにおける近代的身体観が文化的基盤の差異の中でどのように変換されていったかを考察した。

ショメール『日用百科事典』のE項目中のEROTIMANIAの大槻玄沢による翻訳である『厚生新編』第三十八巻雑集所収の「相思病（コイノヤマイ）」は、①定義と区別、②段階と諸症、③治法、④薬剤の内容からなっており、『日用百科事典』では基本的に「狂気」であり結論として「本物の病気」とされているのに対して、『厚生新編』では「精神差錯し煩乱する病」や「相思発狂病」「淫病」と訳されるなど、もっぱら「病」であることが強調されている。また『日用百科事典』では配偶という解決方法が重視されているのに対して、観察と「喩告」「教誨」による道徳的療法が重んじられている。

一方、ショメール『日用百科事典』のS項目中のSUIPENの杉田成卿による翻訳である『厚生新編』続稿二十六巻雑集の「耽飲」は、①悪癖を改める方法、②禁酒の困難、③酒を断する良法、④酒中に入れる吐薬、⑤症状、⑥耽飲の癖を一洗する方法、⑦酒の害の内容からなっているが、『日用百科事典』では反理性的な「疾病」として認識されているのに対して、『厚生新編』では「天道」「天賦」といった儒教的自然観に基づく道徳に反する「悪癖」であるという論理への書き換えが行なわれている。

19世紀の蘭学の特色については、解剖学・病理学などの医学中心から兵制・技術などの軍事学中心への変化がすでに指摘されているが、今一つの変化として、近代的な社会制度とともに社会における個人の心性が、身体同様に普遍的なものとして受容されたことが指摘できよう。しかし理性による肉体の支配という西洋の近代的身体観はその言語化の過程において、彼我の文化的基盤の相違に起因する道徳的差異の中で儒教的道徳の文脈へ変換されたのである。このように『厚生新編』編纂におけるショメール『日用百科事典』項目の採用の背景には、西洋の近代的身体観の受容と言語化の取捨選択があったと思われるが、それについては今後の課題としたい。

註

⑴　ジャック・ベジノ「フランス文化と蘭学－ショメル著『家事辞典』の邦訳」（『ソフィア』、1974 年）。菅野陽「『ショメール』オランダ語版」（有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅲ』創元社、1974 年）。森川甫「『厚生新編』の原著者、ノエル・ショメルについて」（『関西学院大学社会学部紀要』第 40 号、1980 年）。菅原国香「『厚生新編』(一八一一－四五)における化学術語（Ⅰ）」（『東洋大学工学部教養課程紀要』第 33 号、1997 年）。

⑵　板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、1959 年、275-288 頁。

⑶　杉本つとむ『江戸時代西洋百科事典―『厚生新編』の研究―』雄山閣、1998 年、76-80 頁。

⑷　八百啓介「蘭書における『コンストカビネット』について」（『洋学史研究』第 25 号、2009 年）。

⑸　註⑶前掲書、61 頁。

⑹　平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）一般）『１９世紀江戸幕府におけるオランダ語百科事典の翻訳』（研究代表者　八百啓介）。『厚生新編』の項目数および『厚生新編』採用のショメール『日用百科事典』項目数については、上野晶子氏の研究（『蘭学における西洋食文化研究―『厚生新編』を中心として―』平成 20 年度北九州市立大学大学院社会システム研究科学位請求論文）と教示による。

⑺　上野晶子氏は『厚生新編』におけるショメール『日用百科事典』の項目数を 1088 とされているが（上野晶子「宇田川榕菴の西洋食文化研究」『洋学史研究』第 26 号、2009 年）、これには続稿 32 巻の項目数が含まれていないためである（上野晶子「『厚生新編』における「蒲桃酒」項目について」『洋学』第 17 号、2009 年）。

⑻　小川鼎三『医学の歴史』（中央公論社、1964 年）、90-91 頁。

⑼　クレインス・フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』（臨川書店、2006 年）、24・266 頁。

⑽　呉秀三『磯邊偶渉　附　癲癇狂経験編』（精神医学神経学古典刊行会、1979 年）、326 頁。

⑾　『厚生新編』の心的疾病の項目の中にも「酒を用ふる者ハ其脳髄神経共に衰敗す、何となれば耽飲家ハ其神漸く惷愚をなし遂に恍惚として事理を辨せす肢體を運動する諸筋の機力衰耗し麻痺中風を發し」（続稿二十四巻雑集「耽飲」）など、神経説の影響が見られる。影印本『厚生新編』続稿 32 巻（恒和出版、1978 年）、618 頁。

⑿　註⑾前掲書、巻 1 － 20、266 頁。

⒀　Chomel, M.N., *ALGEMEEN HUISHOUDELIJK-, NATUUR-, ZEDEKUNDIG- EN KONST-WOORDENBOEK, Vervattende Veele Middelen om Zijn Goed te Vermeerderen, en Zijne Gezondheid te Behouden, EERSTE DEEL*, Leiden, p.50.(国立国会図書館所蔵本)

⒁　註⑾前掲書、巻 21 － 38、872 頁。

⒂　Chomel, M.N.,*ibid.,TWEEDE DEEL*, p.662.

⒃　註⑾前掲書、続稿 32 巻、611-612 頁。

⒄　Chomel, M.N., *ibid.,ZESDE DEEL*, p.5576.

⒅　註⑾前掲書、続稿 32 巻、613 頁。なお『日用百科事典』の原文では、

【原文】

Een Dronkaart koomt niet dan allengskens tot deeze ondeugd. De lekkere smaak en de aangenaame werking der geestrijk dranken verleiden hem in 't eerste om zich in dezelven toe te geeven, tot dat hij er zich eenige reizen dronken in gedronken heeft. Zo dra zijn roes uitgeslaapen is, dan voelt hij, dat zijn maag bedorven, zijne lustigheid verdooft, zijne leden mat, en het hoofd zwaar zijn. Hij spoed derhalven naar de geestrijke hulp-middelen, waarmede eene vorige ondervinding hem geleerd heeft, dat hij alle deeze ongemakken verminderen kan, en hij drinkt op nieuws. Dus word het hem allengs noodzaakelijk dronken te zijn, naardien zijn maag geduurig slegter word, en alle hinderlijke gevolgen der Dronkenschap daagelijks toeneemen. Men kan derhalven niet zeggen, dat zelfs een Dronkaart, die reeds een meester in zijne konst geworden is, alleen drinkt uit wellust, of met oogmerk om zijn smaak te voldoen. Neen! maar hij weet geen ander huismiddel om het tegenwoordig ongemak, dat hij gevoelt, te verdrijven, en zich, volgens voorgaande ondervindingen, weder te herstellen.（Chomel, M.N., *ibid.,ZESDE DEEL* , p.5576）

【拙訳】

大酒飲みは次第にこの悪徳に至るわけではない。最初は美味と愉快な精神的な飲酒の作用がそれを大目に見るように誘惑して、何回か繰り返して陶然となるに至る。その酩酊が醒めるやいなや、胃の具合が悪く感じ、楽しさが麻痺し、肢体と頭が重く感じる。そのために、以前に学んだ経験から、これらすべての症状を軽減する精神的な救いを求め、再び飲むのである。こうして、胃が悪くなり続けるので、次第に飲むことが必要となり、酩酊のすべての迷惑な結果が日ごとに増加する。したがって、すでに大酒飲みの技を持った名人でさえも、快楽もしくは嗜好を満たす目的からのみ飲むということは出来ない。否、今現在感じている症状を追い払い、過去の経験に従って、再び回復するための他の家庭薬を知らないに過ぎない。

となっている。

⑲　註⑪前掲書、続稿 32 巻、614 頁。これは『日用百科事典』の原文では

【原文】

Dit nieuw ongemak lijd hij derhalven zonder eenig nut, en men moet hem dus niet alleen eene walging tegen zijn drank veroorzaaken, maar hem ook tevens in staat stellen, om het gemis daar van te kunnen verdraagen.De meesten hebben daar in mis, dat zij het eerste alleen doen, zonder op het andere te denken, Wij zullen het beiden bij malkander voegen.(Chomel, M.N., *ibid.,ZESDE DEEL* , p.5576)

【拙訳】

その結果、この新たな症状はなんら利益もなく煩わせるので、飲酒に対する嫌悪を生じなければならないのみならず、同時にその不足に耐えることができるようにしなければならない。ほとんどの人は、後者を考えることなく前者のみを行う思い違いをしている。我々は両方を一緒にしなければならない。

となっており、『厚生新編』では末尾の下線部が省略されている。

⑳　註⑪前掲書、巻 21 － 38、874-875 頁。

㉑　註⑪前掲書、巻 21 － 38、875 頁。

㉒　註⑪前掲書、巻 21 － 38、876 頁。

㉓　註⑪前掲書、巻 21 － 38、876-877 頁。

㉔　石田一良「前期幕藩体制のイデオロギーと朱子学派の思想」（『日本思想大系 23　藤原惺窩・林羅山』岩波書店、1975 年）。

㉕　Chomel, M.N., *ibid.,TWEEDE　DEEL* , p.663.

㉖　註⑪前掲書、続稿 32 巻、622 頁。

㉗　註⑪前掲書、続稿 32 巻、623 頁。

㉘　Chomel, M.N., *ibid.,ZESDE　DEEL* , p.3580.

㉙　Chomel, M.N., *ibid.,ZESDE　DEEL* , p.3580.

付記

本稿は平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）一般）（研究課題「19 世紀江戸幕府におけるオランダ語百科事典の翻訳」）の研究成果の一部である。